京都市都心部における地蔵盆の運営実態と参加者の多様性

— レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究 —

ACTUAL CONDITION OF JIZO-BON MANAGEMENT AND DIVERSITY OF THE PARTICIPANTS
IN THE CENTRAL AREA OF KYOTO

— A study on roles of Jizo-bon in the resilient formation of the local community —

前田 昌弘*, 高田 光雄**, 森重 幸子***, 西野 克裕****

Masahiro MAEDA, Mitsuo TAKADA, Sachiko MORISHIGE
and Katsuhiko NISHINO

In this paper, we examined actual condition of management of *Jizo-bon* in the central area of *Kyoto-city* and analyzed component of participants of *Jizo-bon*. As the result, we clarified people (ex. apartment residents) who tend to be unfamiliar with community activities also join in *Jizo-bon*. This result means that *Jizo-bon* play a role in the creation of a resilient community in terms of improving the "diversity" of community members which is one of the basic characteristics of resilient communities. In addition, we considered about the reason why *Jizo-bon* play a role described as above. We pointed out that *Jizo-bon* has "flexibility" from view of selectivity of events, number of participants and place corresponded to the situation of each communities. These results suggest that community resources like *Jizo-bon* which has experienced change in the long time and succeeded as "the core" of community is meaningful in local community management in the era of uncertainty.

Keywords : Community, Jizo-bon, Resilience, Cho-nai, Moto-gakku, Kyoto-city

コミュニティ, 地蔵盆, レジリエンス, 町内, 元学区, 京都市

1. 序論

1.1. 研究の背景と目的

現代の社会は、大規模自然災害や、少子高齢化に伴う人口構造の転換等、多くの「不確実な変化」に晒されている。近年、そのような「不確実な変化」への対応を考える上で「レジリエンス」という概念が注目されている。「レジリエンス」とは、「自らの基本的な特徴は維持しながらも変化に柔軟に対応する能力」を指し、柳の木の枝が持つような「しなやかな強さ」に例えられる。レジリエンスの必要性は様々な分野で議論されてきたが、近年は地域まちづくりの分野でも「レジリエントなコミュニティ形成」が課題である。

京都市都心部のコミュニティは、図1にも示すように、「両側町」にもとづく「町内」を基本単位とし、「町内」ごとに「町内会」が組織されている。「町内」は、地域の共同管理・相互扶助の基盤であり、かつ複数の「町内」が連合することで、より広域の自治を担う「元学区」を形成する。京都市都心部では、このような「町内—元学区」の重層的なコミュニティの構造のもと、地域自治の文化が醸成されてきた^{注1)}。しかし近年、少子高齢化、産業の変容、開発の増加等の様々な要因を背景として、町内に変化が起きている。具体的には、町内に関わりを持たない住民の増加、町内会の担い手の減少、さらには町内運営に対する「フリーライド」の発生といった問題が生じている。町内コミュニティの弱体化は、町内会加入率の減少、町内行事の廃止・簡略化といった形で顕在化している。

このような状況の中、京都市都心部では地蔵盆という行事が現在も多く町内で行われている。地蔵盆とは地蔵菩薩の縁日である8月24日を中心に、1) 地蔵を祀り、2) 子どもを遊ばせることを基本要素として行われる行事である^{注2)}。地蔵盆の起源は江戸時代初期に遡ると言われ、近年はその歴史的・文化的価値が地域まちづくりの文脈においても認識されている。特に、多世代が参加するという行事の性質上、コミュニティ形成に果たす役割が地蔵盆に期待されている。さらに、地蔵盆は、行事の内容や位置づけを変化させながら、時代の変化や危機に対応し、受け継がれてきた行事であると考えられる。従って、「レジリエントなコミュニティ形成」のあり方を探る上でも地蔵盆は重要であると捉えられるが、その様相は町内によって異なり、地蔵盆の現状は必ずしも明らかではない。

そこで本研究は、まず、京都市都心部における地蔵盆の運営の実態を把握し、次に、地蔵盆がレジリエントなコミュニティ形成に

図1 町内と元学区の関係

* 京都大学大学院工学研究科 助教・博士(工学)
** 京都大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
*** 京都大学大学院工学研究科 研究員・修士(工学)
**** 日本郵政㈱ 修士(工学)(元・京都大学大学院)

Assist. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.
Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.
Japan Post Holdings Co., Ltd., M. Eng.

のような役割を果たすか、また、それは地蔵盆のどのような性質に由来するのか、明らかにすることを目的とする。なお、本稿では特に、レジリエントなコミュニティ形成の条件の一つとされている「主体の多様性」と地蔵盆の関係について検討することとする。

1.2. 既往研究と本研究の位置づけ

本研究に関連する既往研究として、まず、京都の都市コミュニティに関する研究がある。歴史学の分野では、都市史研究として京都の「町」が持つ特殊性と一般性を主な関心とする研究¹⁾が進められてきた。また、社会学の分野では、主に近代以降の京都の「町」を対象として、町内会研究²⁾、コミュニティ研究³⁾が行われてきた。これら人文・社会諸科学における研究には、政治的・行政的視点からのものがみられるが、建築学の分野では、コミュニティと建築・空間の関係にも視点が置かれ、京町家、路地空間、両側町といった、長い時間を経て生成された、都市的共同生活の技術とその論理についての研究^{4),5)}が行われてきた。一方、近年は、少子高齢化の進展、産業の変容に伴う職住分離、開発によるマンションの増加等を背景として、従来の両側町を基礎とした「町内」コミュニティの変化の実態と再編のあり方についての研究^{6),7)}も行われている。

本研究に関連する既往研究として、次に、地蔵盆に関する研究がある。地蔵盆は関西地方を中心として広くみられ、人々の手によって営まれてきた行事であることから、民俗学や宗教学の分野において、地蔵盆と信仰、地蔵盆の展開と受容等についての研究^{8),9)}が行われてきた。建築学の分野においても、京都の地蔵盆についての研究が行われてきた。大別すると、地蔵の祠の配置や地蔵盆の開催場所・空間に着目した都市空間論的な研究^{10),11),12)}、あるいは地蔵盆の持つ機能や運営方法、まちづくりイベントとして取り組まれる地蔵盆の様相等のコミュニティ論的な研究¹³⁾がみられる。なお、京都の祭礼と言えば祇園祭が有名であり、研究の蓄積も多い。祇園祭が「山鉦町」界隈を中心として同日程で開催されるという点で「集中型」の行事だとすると、地蔵盆は京都市の広域で行われ、日程も町内によって異なるという点で「分散型」の行事であると言える。

本研究は、京都の都市コミュニティに関する研究の成果を踏まえ、地蔵盆が地域の自治力の低下という都市問題の緩和に寄与する可能性を探る研究として位置づけられる。とりわけ、レジリエンスという視点から地蔵盆の役割を再評価し、都市コミュニティ研究の発展に資することを目指す点に独自性があると考えられる。

1.3. 研究の方法と構成

第2章では、「レジリエンス」概念について整理する。まず、レジリエントなシステムには「潜在的な性質としてのレジリエンス」と「即応的な能力としてのレジリエンス」という2つの側面があることを述べる。さらに、「潜在的な性質としてのレジリエンス」を構成する「多様性」、「冗長性」という2つの性質について述べる。

第3章では、地域運営における様々な関わりを体系的に捉え、地蔵盆を通じたレジリエントなコミュニティ形成について検討するための基礎とする。まず、京都市都心部の地域コミュニティの特徴および地蔵盆の概要を述べる。次に、地域への様々な関わり方を「町内会を介した関わり」と「地蔵盆を介した関わり」、および「行事への『参加』」と「行事の『運営』」に分類し、さらに、前章の検討結果も踏まえ地域への関わり方を捉えたモデルを作成する。

第4章では、各町内を対象として行った地蔵盆の運営実態の調査

図2 レジリエンス概念

図3 レジリエンスの2つの側面

を踏まえ、地蔵盆の役割について具体的に検証する。前章までの検討結果を踏まえ、特に、「行事への『参加』」に焦点を当て、レジリエントなコミュニティ形成の要件である「主体の多様性」の獲得に対して地蔵盆が果たす役割を検証する。また、地蔵盆を通じて「主体の多様性」が獲得される要因について考察する。

2. レジリエントなコミュニティ形成に関する基礎的検討

2.1. レジリエンス概念

レジリエンスは、生態学、心理学、防災学等、様々な分野で研究されてきたが、研究の歴史が比較的浅く、また汎用性の高い概念であることから、分野や研究者によって様々な定義がされている^{注3)}。本研究では「あるシステムがその基本的な能力を維持しながら不確実な変化に対応する能力」と定義する^{注4)}。なお、ここで「システム」とは、「複数の要素によって構成される一つの系」を指す。

2.2. レジリエントなシステムの特性

レジリエンスには、図2に示すように、“Resistance”（システムが回復不能な影響を受けかねない領域に押しやられることへの抵抗力）と“Recovery”（閾値を超えた際にシステムが適応できる領域を確保し、自らを拡張する適応力）という2つの側面がある^{注5)}。レジリエントなシステムは、軽微な変化に対しては“Resistance”を発揮し、重大な変化に対しては“Recovery”を発揮する。

また、利用可能な資源の質（Resource Robustness）とコミュニティ自体の変化への適応能力（Adaptive Capacity）という2つの側面からレジリエンスを捉える必要性が指摘されている^{注6)}。

上記の議論を踏まえ本研究では、図3に示すように、レジリエントなシステムを、不確実な変化の発生以前に有しておくべき資源の質である「潜在的な性質としてのレジリエンス」と実際に変化が生じた際にそれに対応する力である「即応的な能力としてのレジリエンス」という2つの側面から捉える。さらに、多くの研究で指摘されているように、「潜在的な性質としてのレジリエンス」の要件には、「多様性」(Diversity)と「冗長性」(Redundancy)がある^{注7)}。「多様性」と「冗長性」は、危機的な変化へのシステムの対応を担保し、また、危機的な変化を未然に防止するシステムの形成に寄与する。

2.3. レジリエントなコミュニティ形成の条件

コミュニティのレジリエンスについて検討する。なお、コミュニティとは、きわめて多義的な概念であるが、本研究では、「町内」や「元

学区」といった具体的な範囲を想定し、空間的な近接性を前提とした個々の主体間の様々な関わりとそれらの集合を指すものとする。

まず、コミュニティの「潜在的な性質としてのレジリエンス」における「多様性」とは、「コミュニティに関わる主体の種類の多さ」と捉えられる。「多様性」があることで、不確実な変化が起きた際にリスクが分散され、また、危機を乗り越えるための手段の選択の幅が広がる。また、「冗長性」とは、「主体がコミュニティに関わる際の経路の多さ」と捉えられる。同一の対象について複数の経路があれば、いずれかの経路が破綻した場合でも、もう片方の経路を通じて関わりを保持できる。また、同様に、単一の経路であっても、一方向の関わりに比べて双方向の関わりは冗長性がより高い。

また、「即応的な能力としてのレジリエンス」について、既往研究では、あるコミュニティが不確実な変化に対処し、また、重大な危機を乗り越えた（すなわちレジリエントであった）理由について分析されているが、その機構が必ずしも体系的には整理されていない。その意味で「即応的な能力」が発揮される要件や機構は、特に今後の研究蓄積が必要な領域であると言える。

3. 京都の都心コミュニティにおける地藏盆の様相と位置づけ

3.1. 京都市都心部のコミュニティと地域運営組織

京都の都市構造の特徴を現在も色濃く反映している都心部のコミュニティは、冒頭でも述べたように、「町内」と「元学区」による重層的な構造を特徴としており（図1）、それぞれに組織されている「町内会」と「自治連合会」は、いわゆる「地域運営組織」としての性格を持つ^{注8)}。図4に、下京区・有隣元学区を例として、町内と元学区の組織系統を示した。地域運営組織には様々な機能があることが指摘されているが^{注9)}、「町内会」だけでそれらの機能を全て担うことは不可能であり、かつ望ましくない。実際、京都市都心部において、「自治連合会」、およびその傘下の自主防災会や少年補導委員会といった「各種団体」がそれらの機能の多くを担っている。一方、「自治連合会」では、各世帯への連絡や町内固有の問題への対処等、きめ細やかな対応には限度がある。従って、「町内会」は町内の自治を行いつつ、「自治連合会」の下部組織としても機能している。このように、京都市都心部では、「町内」と「元学区」の重層的な構造を基礎として、「町内会」と「自治連合会」が、相互に補完しながら地域運営組織として機能している。

3.2. 住民の「地域との関わり」の変化

本研究では、「地域における町内会や地藏盆といった住民による活動に参加し、必要に応じてそれら活動の運営を担うこと」を「地域と関わりをもつこと」と定義する。地域運営組織は原則として、コミュニティの全世帯が加入することでその代表性を担保してきた。しかし近年、他の都市と同様、京都市都心部でもこの原則は崩れてきている^{注10)}。町内会に非加入の世帯や、「マンション町」^{注11)}の設立が増加し、「町内」の全世帯が「町内会」に関わるのが困難になっている。一方、各住民の地域への関わり方は多様化している。地域との関わりが持ちづらいマンション住民の中にも、地域の活動に個別に参加し、運営を担うことを望む者が存在することが指摘されている^{注12)}。このことは、「町内会」への加入という関わり方に必ずしも囚われないコミュニティ形成の必要性を示唆する。

以上を踏まえ、本研究では、多様な住民が混在する都心部におい

図4 町内一元学区の組織系統の例

図5 地藏盆の例（中京区A町）

ては、「町内会」という地域運営組織への関わりは、あくまで、複数ある地域への関わり方の一つであると捉える。

3.3. 京都市都心部における地藏盆の諸相

3.3.1. 地藏盆の起源

地藏盆は、地藏菩薩の縁日である8月24日を中心として開催され、①地藏を祀り、②子どもを遊ばせることを基本とする行事である。地藏盆は関西地方で広く行われているが、京都の地藏盆には特に長い歴史がある。江戸時代後期（17世紀末以降）の町式目において地藏盆の記述がみられ、その頃には町内単位で地藏盆が行われていたと推察される。その後、一時的な中断はあったと考えられるが、地藏盆は300年以上に渡って受け継がれてきた行事である。

3.3.2. 地藏盆における行事

地藏盆には町内それぞれのやり方があるため、典型を示すことは困難であるが、ここでは一例として、中京区・城巽元学区のある町内（A町）における地藏盆の様子を紹介する。図5に示すように、地藏盆では通常、プログラムに沿って様々な行事が行われる（プログラムは町内の掲示板等に貼り出される）。行事は、町内の建物や空き地、路上等の様々な場所で行われ、A町のように、警察の許可を得て地藏盆当日は道路を通行止めする場合もある。また、各行事への参加人数は、各人の関心や都合によって増減する。

A町では、朝8時頃から地藏の飾り付けを行い、9時からお供えの受け付けが始まる。おやつの配布がある10時頃から徐々に人が増え始め、数珠回しが始まる10時半の時点で23名（うち子ども7名）が会場にいた。数珠回しとは、地藏の前に輪になって座り、仏僧の読経にあわせて巨大な数珠をまわす行事である。昼食会を行う

町内もあるが、A 町では昼食は各家庭で取る。14 時からは福引きを行い、後におやつ配布、スイカ割り、ボールすくいといった、主に子ども向けの行事が続く。16 時には地蔵のお飾りを片付け、また、テントを移動させ、夜は焼き肉やビンゴ大会、花火等、大人どうしの親睦を兼ねた行事を行い、21 時頃にすべての行事が終了する。

3.3.3. 地蔵盆の運営

地蔵盆への関わり方には、「参加」と「運営」がある。「参加」とは、地蔵盆当日に会場にいて、行事に参加することであり、それらを支える行為として「運営」がある。地蔵盆の「運営」とは具体的には、まず、事前の準備として行事の企画、お供えの準備、仏僧の手配、おやつ・景品の買い出し、会場の手配、町内への告知等がある。次に地蔵盆の当日には、会場の設営、地蔵のお飾り、行事の進行等がある。地蔵盆終了後も、後片づけ、欠席者へのお下がりの配布、町内への会計報告等がある。さらに、地蔵の管理（祠の掃除やお供えの花・水の交換等）や道具の保管等の日常的な業務も含めると、年中、地蔵盆を巡って何らかの役割が生じている。

3.3.4. 地蔵盆の位置づけ

京都市のアンケート調査によると、2012 年現在、町内会が単独で行っている活動は、割合が高い順に「地蔵盆」（76.9%）、「葬儀等の手伝い」（72.6%）、「親睦の会食・旅行等」（46.5%）、「環境・リサイクル」（24.8%）、「環境・美化」（21.3%）等である^{注13)}。このことから地蔵盆は、現在も唯一と言って良いほど、多くの町内で欠かさず行われている年中行事であると言える。さらに、地蔵盆は、個別にみるとささやかな行事であるが、広範囲に渡り数多くの町内で開催されることから、総体として歴史的・文化的な価値を持つ資源としても位置づけられる。実際、行政の施策や地域のまちづくりにおいて近年、地蔵盆を再評価し、保護・活用する動きがある^{注14)}。

3.4. 住民のコミュニティへの関わり方の図式化

3.4.1. 町内会への関わり方みた住民の分類

町内会への関わり方は、まず、町内会に加入しているかどうか、次に、町内会に加入している場合、町内の運営を担うかどうか、という点から分類される。これを踏まえ、町内の住民は、図 6 に示すように、(1) ある年度の町内の役員、(2) 町内会の運営を担う住民、(3) 町内会の運営を担わない住民、(4) 町内会に非加入の住民に分類される。ここで、「町内会の運営を担う」とは、町内会の役員（会長、副会長、会計）を担うことを指す。また、上記のように分類した住民間の関わりは、図 7 に示すようなものとする。

3.4.2. 地蔵盆を介した関わり方の分類

まず、図 8 の (1) 地蔵盆の企画・運営への関わりは、住民と町内会役員（地蔵盆の世話役）との関わりを表す。世話役と他の住民の「双方向の関わり」、世話役から他の住民への「一方方向の関わり」、「関わりがない」という 3 つのパタンがある。ここで世話役から他の住民への矢印は、地蔵盆への事前の参加の呼び掛け等の働きかけを指し、他の住民から世話役への矢印は行事の企画・運営等への協力を指す。次に、図 8 の (2) 地蔵盆当日の行事への参加には、地蔵盆当日の行事に「参加する」、「参加しない」の 2 つのパタンがある。なお、「参加」とは、地蔵盆当日に会場にいて、とする。さらに、図 8 の (3) 地蔵盆への関わりとして、上記の (1) (2) を重ねあわせた、6 つのパタンが想定される。

3.4.3. 地蔵盆を介したレジリエントなコミュニティ形成

記号	●	◎	○	△
説明	(1) ある年度の町内会の役員	(2) 町内会運営を担う住民	(3) 町内会運営を担わない住民	(4) 町内会に非加入の住民
分類	町内会の運営を担う		町内会の運営を担わない	
	町内会に加入している			町内会に非加入
	ある町内に居住している			

図 6 町内会運営への関わり方による住民の分類

◎ ↔ ◎	双方向の関わり：◎の住民は町内会のサービスを受けつつ、町内会の運営も担う（町内会の役員になる）。
◎ → ○	一方方向の関わり：○の住民は町内会のサービスを受けるが、町内会の運営は担わない（町内会の役員にはならない）。
◎ △	関わりなし：△の住民は、少なくとも町内会を介しては、町内の他の住民との関わりがない。

図 7 町内会を介した各住民間の関わり

(1) 地蔵盆の運営との関わり	
◎ ↔ ◎*	双方向の関わり：参加の呼び掛けがあり、準備の手伝いもあり。
◎ → ○	一方方向の関わり：参加の呼び掛けあり（準備の手伝いはなし）。
◎ ○	関わりなし：参加の呼び掛け、準備の手伝い、ともになし。
(2) 地蔵盆当日の行事への参加	
◎ ◎*	当日の参加あり
◎ ○	当日の参加なし
(3) 地蔵盆を介した関わりのパタン	
◎ ○*	関わりなし
◎ → ○	参加の呼び掛けがあるが、当日の参加はなし
◎ ↔ ○	準備の手伝い等で関わるが、当日の参加はなし
◎ ○	呼び掛けや準備等の関わりはないが当日の参加はあり
◎ ◎	参加の呼び掛けがあり、当日の参加もあり
◎ ↔ ◎	呼び掛けや準備等の関わりがあり当日の参加もあり
…当日参加している住民の範囲 * ◎や△にも同様の関わりのパタンがある	

図 8 地蔵盆を通した町内への関わり方の分類

図 9 地蔵盆を介したレジリエントなコミュニティ形成

3.4.2. まです構築したモデル（図 8）を用いて、地蔵盆がレジリエントなコミュニティ形成に寄与すると考えた際に期待される町内の住民間の関わり方の作られ方を示した（図 9）。図 9 の (1) では、各住民の地蔵盆への関わりが、町内会への関わりと同様である。すなわち、地蔵盆に参加するのは町内会加入世帯だけであり、地蔵盆の企画・運営では町内会の運営を担う住民（◎）は協力するが、町内会の運営を担わない住民（○）は参加するだけである。(2) では、町内会とは関わりのない住民（△）が、地蔵盆には参加しており、地域に関わる主体の種類が増えているという点で、地蔵盆を介して

「多様性」が獲得されている。(3) では、町内会運営を担わない住民(○)が地蔵盆に関しては運営を担っており、地域への関わりには複数の経路が生まれているという点で、地蔵盆を介して「冗長性」が獲得されている。(4) では、上記(2)と(3)が同時に達成されている。なお、町内会の活動の一つとして地蔵盆を位置づけている町内は多いが、町内会の運営を担わない住民が地蔵盆には参加したり、運営は担っているような町内の事例も見受けられる。そのため本研究では、上記の(2)(3)(4)は現実により得るモデルと捉えている。そして本稿では特に、地蔵盆への「参加」(図9のグレーの網掛け)に着目した分析を行っている。

4. 地蔵盆への参加呼び掛けと参加者の実態

4.1. 調査の概要

4.1.1. 調査対象地域の概要

図10と表3にそれぞれ、調査対象地域の概要を示した。本稿の目的である地蔵盆の参加者の多様性について把握するためには、ある程度のサンプル(町内)の数を確保する必要性があった。そのため、筆者らが調査への協力依頼をすることが可能であった複数の元学区(待賢、城巽、有隣の3元学区)を調査地域とし、地域内の全ての「町内」(計93町内)を調査対象とした。3つの元学区には、以下に述べるような共通点があり、不確実な変化や危機への地域の対応に果たす地蔵盆の役割という本研究の主題について考察する上で、妥当な地域であると考えられる。

①京都市都心部に立地し、基盤の目状の街区に「両側町」を基本とする町内コミュニティが形成されている。いずれの元学区も30程度の町内から成り、各町内の面積も概ね同じである。

②最近20年程で、マンション開発やミニ開発に伴い新規住民の流入が進み、人口が増加している。マンション居住世帯が全世帯に対して6割～8割と比較的高い割合を占めるが、一方で町家を中心とする町内も存在しており、多様な住民が混在している。

③本来は町内単位の行事である地蔵盆が、元学区単位のまちづくり活動の一環としても取り組まれており、地蔵盆が地域の資源として捉えられていると考えられる地域である。

4.1.2. 調査の内容と方法

(1) 地蔵盆の運営実態に関するアンケート調査(表1)

各町内の町内会長に対するアンケートを行い、町内の地蔵の管理、地蔵盆の運営の方法等を把握した。各元学区の自治連合会を通じて配布し、郵送によって回収した。計81町内(待賢・27町内、城巽・27町内、有隣・30町内)から有効な回答を得た^{注15)}。

(2) 地蔵盆当日の様子の実地調査(表2)

地蔵盆当日に各町内を訪れ、行事の様子、開催場所、参加者の数・内訳等を目視と聞き取り等により把握した。

調査対象の選定に際して、上述のアンケート調査で地蔵盆を開催していると回答した計68の町内全ての調査を試みた。しかし、同日に複数の町内で開催されるという地蔵盆の行事の性質上、筆者らの限られた調査員(筆者等および研究室の大学院生ほか延べ58人)では実際に全ての町内を訪れることは困難であった。そのため、結果的に調査が可能であったのは、計62町内(待賢・21町内、城巽・20町内、有隣・21町内)であったが、本稿の目的を達成する上では十分なサンプル数を確保できたと考えられる。

図10 調査対象学区の位置

表1 事前アンケートの概要

調査対象	当該の3学区における計93の町内会の町内会長
質問内容	地蔵の管理、地蔵盆の運営、町内会の運営の現状等
実施方法	自治連合会を通じて町内会長に配布し、後日、郵送にて回収
実施時期	2012年6月～8月
回収結果	81町内回収(回収率87.1%)

表2 地蔵盆当日実地調査の概要

調査対象の候補	アンケートで地蔵盆を開催していると回答した計68の町内
実際の調査対象	調査可能であった計62の町内
調査内容	行事の内容・時間、場所利用、参加者の数・構成など
実施方法	各地域に事前相談の上、調査員(延べ58人)が当日に訪問
実施時期	2012年8月18日、19日、25日、26日(計4日)

表3 調査対象とする3つの元学区の概要

	人口	世帯数	共同住宅 世帯率(%)	町内数(*)
待賢学区	3913人	2084	56.8	29
城巽学区	4902人	2918	80.6	28
有隣学区	4283人	2793	80.4	27

*マンション町(マンション一棟で町内会を構成する町内)は含まない

表4 地蔵の有無(町内に地蔵があるか。単数回答)

元学区	待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
あり	24	88.9	20	75.0	24	76.7	65	80.2
なし	3	11.1	6	25.0	7	23.3	16	19.8
合計	27	100.0	24	100.0	30	100.0	81	100.0

表5 祠の有無と地蔵の管理方法(複数回答)

管理方法		元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
		地蔵数	%	地蔵数	%	地蔵数	%	地蔵数	%	地蔵数	%
祠あり	週または月単位の輪番で管理	8	27.6	9	30.0	15	55.6	32	37.2		
	年単位以上で特定の人が管理	10	34.5	9	30.0	6	22.2	25	29.1		
祠なし	年単位以上で特定の人が保管	7	24.1	9	30.0	3	11.1	19	22.1		
	町内外の寺で保管	4	13.8	3	10.0	3	11.1	10	11.6		
合計		29	100.0	30	100.0	27	100.0	86	100.0		

4.2. 調査対象地域におけるコミュニティと地蔵盆

4.2.1. 地蔵の数と日常的な管理

表4に示すように、回答があった町内の約80%にあたる65町内に地蔵がある。また、表5に示すように、地蔵の総数は86体であり、その約66%にあたる57体が普段は路上等の祠に祀られている。その他の地蔵は、個人宅や町外の寺等で保管されており、地蔵盆の日以外は人目に触れない。地蔵の日常的な管理(祠の掃除、花・水の交換等)は、週または月単位での輪番、一年を通して特定の人が

保管、町内外の寺院で保管等、様々な方法がある。

4.2.2. 地蔵盆の開催状況と規模

表6に示すように、回答があった町内の約84%にあたる68町内で地蔵盆が開催されている。町内によっては普段は町外の寺等で地蔵を保管しており、地蔵盆の当日だけ町内で祀るという方法を採用しているところもあり、地蔵の保管方法と地蔵盆の開催形式には柔軟な関係がある。

また、表7に示すように、地蔵盆への参加の呼び掛けを受けた人数（およその規模を表す）は、平均すると50人程度であるが、最大で135人、最小は3人であり、かなりの幅がある。少人数でも続けられていることから、担い手が不足しがちな町内でも地蔵盆は開催可能であると言える。

4.3. 地蔵盆への参加の呼び掛け

4.3.1. 町内会への加入の状況

町内会加入世帯率の概算が可能な町内は計62町内であった^{注16)}。いずれの学区でも多くの町内で、全国の政令指定都市の平均77.2%を下回っていた。一方で、加入率が100%に近い町内も一定数みられ、町内によって加入率のばらつきがあった。マンション世帯の町内会加入率は、約30%の町内で「不明」であり、「不明」を除くと、マンションの住民が町内会に加入している町内は半数に満たないことがわかった。このことから、少なくとも町内会への加入という点からは、地域に関わりを持たない住民が多いと言える。また、町内会に加入している場合でも、管理会社等が1棟分の町内会費をまとめて支払う場合もあり^{注17)}、その場合、各住民には町内会に所属しているという意識がなく、実質的な関わりはない可能性が高い。

4.3.2. 参加の呼び掛けの方法と範囲

表8に地蔵盆への参加の呼び掛けの方法を示した。回覧板での告知を基本としながら、町内の掲示板での告知やチラシの配布等も行っている町内がある。各戸への訪問や口伝いでの連絡を行っていると言えた町内は少ないが、回覧板を渡す際に直接対面して呼び掛ける場合もあると考えられる。町内会に非加入の場合は、回覧板がまわってこないが、町内会に関わりを持たない住民であっても掲示板の告知等をみて地蔵盆の開催について知ることはできる。

表9に参加の呼び掛けの範囲を示した。「町内会加入戸建て・長屋世帯」には呼び掛けがある。一方で、「町内会非加入マンション世帯」に呼び掛ける町内の割合は低い。これには、そもそも町内会に加入しているマンション世帯が少ないことや、町内会に加入していても実質的には関わりがないケースが多いこと等の理由がある。また、地蔵盆は子どもを中心とした行事であるが、「町内会に非加入の子育て世帯」に呼び掛ける町内はほとんどなく、町内会への加入が参加の呼び掛けの要件であることがわかる。一方で、「町外に住む家族や親戚の世帯」（外孫）への呼び掛けが行われている。

4.3.3. 参加者の把握および費用負担の方法

「地蔵盆の参加者を事前に把握している」と答えたのは、地蔵盆を開催する町内の約85%にあたる58町内であった。表10に把握の方法を示したように、本人への確認や参加申込書によって参加者を正確に把握する町内もあるが、「毎年参加する人は決まっている」と答えている町内も少なくない。また、「参加申込書を配る」という場合も、おやつや景品の準備、食事会の会場予約等、人数の把握が必要な行事についてのみ行っている町内があった。以上のよう

表6 地蔵盆の有無（単数回答）

地蔵盆	元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
あり	24	88.9	20	83.3	24	80.0	68	84.0		
なし	3	11.1	4	16.7	6	20.0	13	16.0		
合計	27	100.0	24	100.0	30	100.0	81	100.0		

表7 地蔵盆の開催規模（地蔵盆への参加の呼び掛けを受けた人数）

	待賢	城巽	有隣	全体
最大	112人	135人	83人	135人
最小	20人	13人	3人	3人
平均	約61人	約48人	約40人	約50人

表8 地蔵盆への参加の呼び掛けの方法（複数回答、n=68）

方法	元学区		待賢 (24)		城巽 (20)		有隣 (24)		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
掲示板等で告知	4	16.7	9	45.0	8	33.3	21	30.9		
回覧板	15	62.5	17	85.0	14	58.3	46	67.6		
チラシの配布	9	37.5	6	30.0	8	33.3	23	33.8		
町内会の集まりで呼び掛け	1	4.2	0	0.0	0	0.0	1	1.5		
各戸を直接訪問して	2	8.4	0	0.0	3	12.5	5	7.5		
口伝いで	2	8.4	1	5.0	3	12.5	6	8.8		
その他	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	3.0		
全町内に占める割合	<div><div></div>10%未満</div> <div><div></div>10%以上50%未満</div> <div><div></div>50%以上</div>									

表9 地蔵盆への参加の呼び掛けの対象（複数回答、n=68）

対象	元学区		待賢 (24)		城巽 (20)		有隣 (24)		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
町内会加入戸建て・長屋世帯	18	75.0	17	85.0	21	87.5	56	82.4		
町内会加入マンション世帯	3	12.5	5	25.0	5	20.8	13	19.1		
町内会未加入の子育て世帯	2	8.3	0	0.0	0	0.0	2	2.9		
昔から町内に住んでいる世帯	6	25.0	9	45.0	5	20.8	20	29.4		
最近町内に住み始めた世帯	3	12.5	4	20.0	5	20.8	12	17.6		
町外の親戚・家族の世帯	7	29.2	4	20.0	5	20.8	16	23.5		
町外の親戚・家族以外の世帯	1	4.2	0	0.0	0	0.0	1	1.5		
その他	0	0.0	0	0.0	2	8.3	2	2.9		
全町内に占める割合	<div><div></div>10%未満</div> <div><div></div>10%以上50%未満</div> <div><div></div>50%以上</div>									

表10 地蔵盆への参加者を事前に把握する方法（複数回答、n=58）

方法	元学区		待賢 (24)		城巽 (20)		有隣 (24)		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
町内会の集まりの時に聞く	4	16.7	0	0.0	1	4.2	5	7.4		
各住戸を訪ねて直接聞く	1	4.2	0	0.0	3	12.5	4	5.9		
参加申込書を配布する	3	12.5	6	30.0	8	33.3	17	25.0		
毎年参加する人は決まっている	9	37.5	8	40.0	10	41.7	27	39.7		
その他	6	25.0	5	25.0	1	4.2	12	17.6		
全町内に占める割合	<div><div></div>10%未満</div> <div><div></div>10%以上50%未満</div> <div><div></div>50%以上</div>									

表11 地蔵盆の開催費用の出所（複数回答、n=68）

出所	元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
町内会費の一部	13	54.2	10	50.0	14	58.3	37	54.4		
町内会費とは別会計の資金	1	4.2	6	30.0	8	33.3	15	22.1		
町内会以外の団体の資金	1	4.2	1	5.0	1	4.2	3	4.4		
特定の個人の資金	0	0.0	1	5.0	0.0	0.0	1	1.5		
地蔵盆当日の寄付金	19	79.2	12	60.0	16	66.7	47	69.1		
その他	0	0.0	1	5.0	1	4.2	2	2.7		
全町内に占める割合	<div><div></div>10%未満</div> <div><div></div>10%以上50%未満</div> <div><div></div>50%以上</div>									

に、参加者の把握の方法は慣習的あるいは部分的であると言える。

また、表11に示すように、地蔵盆の開催費用は「町内会費の一部」（約54%）と「地蔵盆当日のお供え（寄付金）」（約69%）によって賄われている。一方で、地蔵盆への参加の実態に応じて、町内会費とは別途徴収する等、柔軟にきめ細かく対応している町内もある。

4. 4. 参加者の実態と町内における地蔵盆の役割

先述のように、マンション世帯は町内会への関わりが少なく、地蔵盆への参加呼び掛けもされにくい傾向がある。そこで、ここでは地蔵盆の参加者の実態をみる上で、マンション世帯^{注18)}に注目する。

表12は、参加呼び掛けの範囲と実際の参加者を把握できた計49の町内^{注19)}について、マンション世帯の参加状況を表したものである。図11はさらに、表12の内容を前章で検討したモデルで表したものである。なお、町内会に非加入の世帯に加え、棟単位で加入しているマンション世帯についても町内会とは実質的な関わりがない場合が少なくない。従って本研究では、それらの住民が地蔵盆に参加している図11のパタン2および4を、地蔵盆を通じた多様性の獲得の例として捉えている。また、前章では町内会の運営を担う住民を◎、担わない住民を○と表したが、ここでは町内会の運営には触れないため、簡便のため◎と○を併せて○と表記する^{注20)}。

まず、参加の呼び掛けについてみると、町内会に各世帯が個別に加入しているマンションがある町内（J03、J05、Y04、Y05、Y15等）では、マンションの住民に対しても呼び掛けがあった。当日の聞き取りからも、「マンションの住民も町内会の運営に関わってもらっている」等の発言が得られた。一方、町内会に棟単位で加入、あるいは町内会に非加入のマンションに関しては、前節でも確認したように参加の呼び掛けがほぼ無かった。従って、図11でパタン1と2に該当する町内は一部の例外を除き、存在しなかった。

さらに、参加の実態も含めてみると、図11のパタン3のように、町内会に個別加入している住民で呼び掛けも実際の参加も完結しているという町内が多くみられる。一方、パタン4のように、参加の呼び掛けがなかった住民であっても、当日は参加しているという町内も一定数みられた。このことは、地蔵盆が、町内会に加入していない住民にとって町内に関わる契機となっていることを示唆する。

パタン4の具体例として、J03の町内では、個別加入しているマンション1棟にのみ呼び掛けると回答しているが、実際には当日、複数のマンションからの参加が確認された。T04の町内では、「マンションの人達に声をかけても参加が少ないので声を掛けるのをやめた」という発言が得られたが、実際には6名のマンション住民の参加がみられ、その中には「はじめて参加する」という者もいた。

以上のように、町内と関わりを持ちにくい傾向がある住民（マンション住民）であっても、地蔵盆には参加している様子が確認された。地蔵盆に参加しているマンション世帯数が全体に占める割合は決して高くない。しかしながら、3.2. や4.3. で述べたようにマンション世帯が地域と関わりを持つことが困難である京都市都心部のコミュニティの現状を踏まえると、たとえ少数であってもマンション世帯の参加者が存在することには意義があり、町内における主体の「多様性」の獲得に地蔵盆が役割を果たしていると考えられる。

4. 5. 参加者が多様となる要因に関する考察

4. 5. 1. 行事の内容の選択性

表13に各町内の地蔵盆における行事を示した。「お飾り」(91.2%)や「読経」(75.0%)は、ほとんどの町内で行われており、地蔵盆に欠かせない行事である。また、「おやつやの配布」(75.0%)や「お下がりの配布」(77.9%)も多く町内で行われている。これは、手軽にできて、多くの住民が参加しやすいためであると考えられる。また、「ゲーム」(45.6%)、「子どもの遊び」(42.6%)、「足洗」(36.8%)

表12 マンション世帯の地蔵盆への参加の状況

元学区	町内	マンション住民の町内会への加入	マンションからの参加人数		回答者数
			○	△	
待賢	T01	あり（世帯単位）	6	—	7
	T02	あり（棟単位）	—	4	15
	T03	なし	—	1	18
	T04	あり（棟単位）	—	0	12
	T05	なし	—	3	21
	T06	あり（世帯単位）	9 ^{*1}	—	34
	T07	なし	—	2	19
	T08	なし	—	0	4
	T09	—	—	—	9
	T10	なし	—	1	14
	T11	なし	—	2	14
	T12	あり ^{*2}	2	—	24
	T13	あり（棟単位）	—	0	24
	T14	なし	—	6	26
	T15	あり ^{*2}	0	—	36
	T16	なし	—	0	15
	T17	なし	—	2	12
	T18	あり（棟単位）	1	0	17
城巽	J01	あり（棟単位）	—	0	6
	J02	なし	—	0	16
	J03	あり（世帯単位）	9	1 ^{*1}	38
	J04	あり ^{*2}	—	0	27
	J05	あり（世帯単位）	9	0	22
	J06	なし	—	0	13
	J07	なし	—	0	10
	J08	あり（棟単位）	—	0	19
	J09	あり（世帯単位）	3 ^{*1}	—	7
	J10	あり ^{*2}	4	—	20
	J11	あり（世帯単位）	1 ^{*1}	—	15
	J12	なし	—	0	19
有隣	J13	あり（棟単位）	—	0	19
	J14	なし	—	2	26
	J15	あり（棟単位）	—	0	9
	J16	あり（棟単位）	—	1	10
	Y01	あり（棟単位）	—	1	11
	Y02	あり（世帯単位）	2 ^{*1}	—	11
	Y03	なし	—	0	26
	Y04	あり（世帯単位）	11	3 ^{*1}	31
	Y05	あり（世帯単位）	20	0	37
	Y06	あり（世帯単位）	5 ^{*1}	—	14
	Y07	あり（棟単位）	—	0	32
	Y08	—	—	—	8
	Y09	あり（棟単位）	—	4	16
	Y10	あり（棟単位）	—	0	27
	Y11	あり（棟単位）	—	0	30
	Y12	—	—	2 ^{*1}	32
	Y13	—	—	—	25
	Y14	あり（棟単位）	—	0	9
	Y15	あり（世帯単位）	5	0	10

【凡例】
T11 町内番号
元学区記号
T：待賢学区
J：城巽学区
Y：有隣学区
○…町内会に個別加入しているマンション住民
△…町内会に1棟加入または非加入のマンション住民
— …該当なし（町内に存在しない）
■…参加呼び掛け有り
□…参加呼び掛け無し
【注釈】
※1 マンション名を特定できなかった回答者の数（○か△か判別できず）。
※2 一棟単位での加入か世帯単位での加入であるか不明。

図11 地蔵盆への参加のパターンと実際

表 13 町内で行っている地藏盆の行事（複数回答、n=68）

行事内容	元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
仏事系	地藏のお飾り	21	87.5	18	90.0	23	95.8	62	91.2	
	数珠まわし	15	62.5	11	55.0	14	58.3	40	58.8	
	仏僧による読経	17	70.8	13	65.0	21	87.5	51	75.0	
	お寺のお参り	1	4.2	1	5.0	2	8.3	4	5.9	
配布系	おやつ配布	20	83.3	15	75.0	16	66.7	51	75.0	
	お供えのお下がり配布	18	75.0	18	90.0	17	70.8	53	77.9	
	子ども向けの福引	15	62.5	8	40.0	11	45.8	34	50.0	
	大人向けの福引	11	45.8	6	30.0	9	37.5	26	38.8	
遊び系	子どもの遊び（金魚すくい等）	12	50.0	8	40.0	9	37.5	29	42.6	
	ゲーム（ビンゴ・数当て等）	12	50.0	7	35.0	12	50.0	31	45.6	
	ショー・出し物	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	昼食会	6	25.0	4	20.0	7	29.2	17	25.0	
食事系	夕食会	8	33.3	3	15.0	2	8.3	13	19.1	
	足洗い	9	37.5	10	50.0	6	25.0	25	36.8	
	ホテル等での懇親会	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	2.9	
	その他	3	12.5	2	10.0	4	16.7	9	13.2	

全町内に占める割合 20%未満 20%以上70%未満 70%以上

表 14 町内における地藏盆の位置づけ（複数回答、n=68）

位置付け	元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
子どもの安全の祈願	18	75.0	13	65.0	19	79.2	50	73.5		
先祖の供養	10	41.7	10	50.0	14	58.3	34	50.0		
商売繁盛の祈願	3	12.5	0	0.0	1	4.2	4	5.9		
大人の集まり	4	16.7	2	10.0	6	25.0	12	17.6		
地域住民の親睦	20	83.3	18	90.0	21	87.5	59	86.8		
家族・親戚が集まる機会	1	4.2	1	5.0	1	4.2	3	4.4		
町内の伝統行事	19	79.2	15	75.0	19	79.2	53	77.9		
地藏があるので続けてきた	11	45.8	12	60.0	14	58.3	37	54.4		
世話役が回ってくるので続けている	5	20.8	5	25.0	6	25.0	16	23.5		

全町内に占める割合 20%未満 20%以上70%未満 70%以上

表 15 地藏盆の開催場所（複数回答、n=68）

開催場所	元学区		待賢		城巽		有隣		合計	
	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%	町内数	%
祠の周辺	4	16.7	3	15.0	3	12.5	10	14.7		
道路沿い	2	8.3	2	10.0	3	12.5	7	10.3		
路地沿い	0	0.0	1	5.0	1	8.3	2	2.9		
個人宅の敷地内	12	50.0	9	45.0	5	20.8	26	38.2		
個人宅の室内	4	16.7	12	60.0	5	20.8	21	30.9		
マンションの敷地内	1	4.2	0	0.0	1	4.2	2	2.9		
会社・倉庫等の敷地内	2	8.3	0	0.0	2	8.3	4	5.9		
お寺・神社の敷地内	3	12.5	3	15.0	2	8.3	8	11.8		
その他	2	8.3	0	0.0	1	4.2	3	4.4		

全町内に占める割合 10%未満 10%以上30%未満 30%以上

を含む「食事会」等は必ずしも必須の行事とは言えないが、町内の子どもの数や担い手の有無といった町内の事情に応じて取捨選択されている。このような行事の選択の幅の広さが、地藏盆が継続され、かつ多様な住民が参加している要因の一つであると考えられる。

4.5.2. 行事の位置づけの多面性

表 14 に各町内における地藏盆の位置づけを示した。「子どもの安全祈願」（73.5%）や「先祖の供養」（50.0%）といった従来のものに加え、「地域住民の親睦」（86.8%）や「町内の伝統行事」（77.9%）、「大人の集まり」（17.6%）といった比較的新しいと思われる位置づけもみられ、地藏盆には、それぞれの町内にとっての意義が付与されていることが読み取れる。また、「地藏があるので続けてきた」（54.4%）や「世話役が回ってくるので続けている」（23.5%）といった半ば義務的な行事であるという位置づけもみられた。このような、歴史性を背景としたある種の「強制力」が働くことも地藏盆が続けられて

図 12 Y14 町の花地蔵盆（限られた行事で行われる花地蔵盆の事例）

行事スケジュールと参加人数		
8月25日（土）		
10:00	お飾り	
13:30	数珠まわし	大人9人 子供3人
14:15	仏僧のお話

図 13 J03 町の花地蔵盆（多くの行事が行われる花地蔵盆の事例）

行事スケジュールと参加人数		
8月25日（土）		
15:00	お飾り	大人16人
19:00	ビンゴゲーム	大人・子供 約50人
8月26日（日）		
9:00	お参り	大人31人 子供15人
10:00	おやつ・福引	大人22人 子供16人
11:00	ボールすくい	
12:00	焼ソバ	大人25人 子供8人
14:00	かき氷	大人28人 子供10人
15:00	片付け	

きた要因の一つであると考えられる。

4.5.3. 開催場所・空間の開放性

表 15 に、地藏盆の開催場所・空間を示した。「個人宅の敷地内」（38.2%）、「個人宅の室内」（30.9%）という回答が多く、個人の空間を地藏盆の日に開放していることがわかる。現地を確認すると、町家のミセの間、住宅のガレージといった開放的なスペースで行われていることが多かった。また、その他の場所についても、「路上」（10.3%）や「お寺の境内」（11.8%）といった公共的な空間であった。このように、地藏盆は開放的・公共的な空間で開催されるため、人目につきやすく、参加のきっかけが生まれやすいと考えられる。

4.5.4. 開催方式の「柔軟性」

地藏盆は、限られた行事と場所でも成立する。例えば、Y14 の町内（図 12）では、町内の規模が小さいこともあり、地藏盆は住宅のガレージを使用し、仏僧の読経にあわせた数珠回しだけを行っている。本稿の冒頭 1.1. では、1）地藏を祀り、2）子どもを遊ばせることを地藏盆の基本要素として挙げたが、この事例では町内に子どもが少ないこともあり、上記の 1）のみで開催されている。少子高齢化に伴い、地藏盆のあり方も変容していると推測される。

一方で地藏盆は、町内の多くの資源を活用し、盛大に開催することもできる。例えば、J03 の町内（図 13）では、町内全体を地藏盆の会場として、2 日間に渡って様々な行事が行われる。J03 の町内は古くからの住民が多かったが、近年、マンションが複数建設され、住民が急増した。マンションの子育て世帯を町内の活動に取り込み、地藏盆も現在のように盛大になった。このように、地藏盆には、各町内の事情に応じた方法で開催できる「柔軟性」がある。

5. 結論

本稿で対象とした京都市都心部の3学区・93町内のうち8割強の町内で地蔵盆は継続されていることが明らかになった。一方、行事の内容や参加者には近年の少子高齢化等を背景とした変化もみられることから、地蔵盆は変容しつつも継続していると考えられる。

次に、地蔵盆の当日の参加者には、町内との関わりが一般的に持ちづらい傾向がある住民（マンション世帯等）も含まれており、かつ事前の参加の呼び掛けがされなかった者や町内の活動にはじめて参加する者も含まれていることが明らかになった。すなわち、町内会への加入という地域への関わり方に加え、地蔵盆への参加という関わり方があることで、地域に関わる主体がより多様となっていた。このことから地蔵盆は、レジリエントなコミュニティ形成における「潜在的な性質」の条件の一つである「主体の多様性」の獲得に寄与するという点において役割を果たしていると言える。

さらに、地蔵盆によって地域に関わる主体が多様となる背景には、子どもの数や担い手の有無といった各町内の個別の事情に応じて行事の内容や位置づけが調整可能であること、開放的な場所・空間で開催されることが多く、かつ限られた場所・空間でも開催可能であること、といった要因があると考えられる。このことは地蔵盆のもつ「柔軟性」の表れであると推察されることを指摘した。

以上のように本稿ではレジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割について、その一端ではあるが、明らかにした。このことは地域のまちづくりにおいて、地蔵盆のような長い時間経過の中で変化や危機を経験しながらも地域において存続してきた資源を保全し活用することの必要性和有用性を示唆する知見である。

なお、今回調査を行ったのは限られた町内・学区であったが、これらの地域は京都市都心部のコミュニティの特徴を有すると捉えられることから、得られた知見は少なくとも京都の都心地域においては一般性を持つと考えられる。一方、「多様性」とともにレジリエンスの「潜在的な性質」の条件を構成する「冗長性」については本稿では実証的に分析しておらず、不確実な変化や危機が起きた際に地域が実際に対応し得るか検証されていない。今後、地蔵盆の「運営」や地蔵盆の行事の性質についてのより詳細で多面的な分析、不確実な変化や危機を実際に乗り越えた地蔵盆の事例の分析等を通じて、「即応的な能力」としてのレジリエンスが発揮されるための要件を探る必要がある。これについては別稿で論じることとする。

謝辞

調査には地域住民と京都市の関係者にご協力頂いた。また、本研究は（公財）大学コンソーシアム京都「未来の京都創造研究事業」の助成による研究の成果の一部である。ここに記して謝意を表す。

注

- 注1)「元学区」とは、明治初期に創設された番組小学校の校区である。ほとんどの番組小学校は現在、少子化に伴い統廃合され閉校となっているが、「元学区」は、地域自治の単位として存続している（詳細は参考文献1,2を参照）。
- 注2)参考文献9における定義を参照した。
- 注3)レジリエンス概念のレビューについては参考文献14,15が詳しい。
- 注4)参考文献16の定義を参考にした。
- 注5)参考文献17において指摘されている。
- 注6)コミュニティのレジリエンスについて論じた参考文献18が指摘している。
- 注7)参考文献14,15がレジリエントなシステムの要件について検討している。
- 注8)参考文献19によると、地域運営組織とは、「原則として一定の地域的区画において、そこで居住しない営業する全ての世帯と事業者を組織すること

を目指し、その地域的区画内に生じる様々な問題に対処することを通して、地域を代表しつつ、地域の管理に当たる住民自治組織」である。

注9)参考文献20は、地域運営組織が持つ機能として、①親睦、②共同防衛、③環境整備、④行政補完、⑤压力団体、⑥町内の統合調整、⑦社会教育、⑧地域代表、⑨地域福祉、⑩地域文化といった10の機能を挙げている。

注10)参考文献19,20において指摘されている。

注11)「マンション町」とは、「マンション」（分譲型の中高層共同住宅）のみで町内会が組織されている町内のことを指す。

注12)参考文献6,7において指摘されている。

注13)参考文献21を参照した。京都市全域を対象としたアンケート調査を行い、3,721の町内会・自治会から有効な回答を得ている。

注14)京都市では、「京都をつなぐ無形文化遺産」として「京の地蔵盆」を選定した（2014年11月）。また、元学区では、まちづくりのイベントとして、地蔵盆（待賢学区:「たいけん地蔵盆」、城巽学区:「城巽地蔵盆」、有隣学区:「マンションの子どもたちのための地蔵盆」、「ふれあい地蔵盆」、「いきき有隣地蔵めぐり」など）が行われている（参考文献13参照）。

注15)行政の区画の上では計84の町内があったが、各元学区の自治連合会等によると、実際にはマンション1棟から成る町内や、世帯数が減少して実質がない町内もあることがわかり、結果として計93の町内を調査対象とした。

注16)町内会加入世帯率＝町内会加入世帯数÷町内居住世帯数×100として、アンケート調査および2010年度国勢調査の結果を用いて概算した。

注17)マンションについて「町内会に関わりがある」と答えたのは26町内であり、そのうち15町内が「1棟単位で町内会費を払っている」と答えている。

注18)「マンション」とは本来、中高層の分譲共同住宅を指すが、本研究では賃貸や低層のものも含む「共同住宅」全般を「マンション」と呼んでいる。

注19)参加者の人数と内訳を把握するために、地蔵盆当日、簡単な質問用紙を配り、参加者の性別・年齢層・町内居住歴・住宅形式（マンションの場合は名称も）・地蔵盆参加頻度を尋ねた。各町内の許可を得て、地蔵盆の会場にいる人に用紙を配布し、手渡ししか町内に設置した回収箱によって回収した。

注20)○は戸建て・長屋世帯および町内会に世帯単位で加入しているマンション住民、△は1棟単位で町内会に加入しているマンション住民または町内会に加入していない住民（マンション、戸建て・長屋の両方）ということになる。

参考文献

- 1) 秋山国三、仲村研：京都「町」の研究，法政大学出版局，1975
- 2) 岩崎信彦（編著）：町内会の研究，御茶の水書房，1989
- 3) 鯉坂学、小松秀雄（編著）：京都の「まち」の社会学，世界思想社，2008
- 4) 島村昇：京の町家－生活と空間の原理，鹿島研究所出版，1971
- 5) 上田篤（編著）：京町家－コミュニティ研究，鹿島出版会，1976
- 6) 坂井裕介、鳴海邦碩ほか：京都市における元学区及び町内会の活動実態と都心マンション居住者の地域意識に関する研究－明倫学区を事例として，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系，第42号，pp. 625-628, 2002
- 7) 加茂みどり，高田光雄，後藤智揮：京都太子山町における住民のパーソナルネットワーク，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-2分冊，pp. 461-462, 2005
- 8) 田中久夫：地蔵信仰と民俗，木耳社，1989
- 9) 林英一：地蔵盆－受容と展開の様式，初芝文庫，1997
- 10) 野口美智子：京都西陣における地蔵盆の演出空間，日本建築学会大会学術講演梗概集，計画系，第53号，pp. 1087-1088, 1978
- 11) 西村信治，室崎生子，森靖夫：地蔵盆を通してみた地域の子供の発達保障の空間づくり，日本建築学会大会学術講演梗概集，F分冊，pp. 333-334, 1986
- 12) 竹内泰，布野修司：京都における地蔵の配置に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第520号，pp. 263-270, 1999. 6
- 13) 伊東俊亮，高田光雄，前田昌弘ほか：有隣学区地蔵めぐりイベントにおける町内と学区の関係－京都市都心部における地蔵盆の役割に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-1分冊，pp. 445-446, 2011
- 14) A. Bahadur et al. : Resilience renaissance?, SCR discussion paper1, Institute of Development Studies, 2010
- 15) A. Zolli et al. : Resilience -Why Things Bounce Back, Free Press, 2012
- 16) S.B. Manyena : The Concept of Resilience Revisited, Disasters, vol. 30, issue4, pp. 433-450, 2006
- 17) 京大・NTT リジエンス共同研究グループ：しなやかな社会の創造，日経BPコンサルティング，2009
- 18) P. Longstaff et al. : Building Resilient Communities-A Preliminary Framework for Assessment, Homeland Security Affairs, Vol. 6 no. 3, 2010
- 19) 山崎丈夫：地域コミュニティ論，自治体研究社，2003
- 20) 倉沢進，秋元律郎：町内会と地域集団，ミネルヴァ書房，1990
- 21) 京都市：京都市自治会・町内会アンケート報告書，2012

ACTUAL CONDITION OF JIZO-BON MANAGEMENT AND DIVERSITY OF THE PARTICIPANTS IN THE CENTRAL AREA OF KYOTO

– A study on roles of Jizo-bon in the resilient formation of the local community –

Masahiro MAEDA *, *Mitsuo TAKADA* **, *Sachiko MORISHIGE* ***
and Katsuhiro NISHINO ****

* Assist. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

** Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

*** Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.

**** Japan Post Holdings Co.,Ltd., M. Eng.

“Resilience” is defined as “ability of system to maintain its fundamental character and correspond with uncertain external change” and often expressed to “flexible robustness” like as blanches of willow. Resilience has been discussed in the various fields such as material science, psychiatry, biology and disaster management and recently applied to the field of Machi-zukuri to consider about succession and reorganization of local communities.

On the other hand, “Jizo-bon” is a ceremony which is seen widely in the Kansai district of Japan mainly on 24th August, the ceremonial day of Jizo-bosatsu which is a god of Buddhism. Jizo-bon is composed by two fundamental factors, 1) decorating and praying Jizo-statue and 2) playing children in front of Jizo-statue. Jizo-bon has been succeeded and managed by “Cho” communities which are basic units of communities in the central area of Kyoto while local communities have been weakened in recent uncertain social changes due to decreasing number of children, aging population, decline of local industry and development of hi-rise apartment etc.

This study regards Jizo-bon as a community resource which has been succeeded by corresponding with various uncertain changes and crises and explores a way to resilient succession and reorganization of local communities based on investigation of actual condition of Jizo-bon management. Concretely, we examine how Jizo-bon contributes to improvement of “diversity” of community actors which is one of the conditions of resilient community and consider on the roles of Jizo-bon on resilient succession and reorganization of local communities.

In the result, firstly, we clarified approximately 86% of Cho which are selected (93 cho in 3 Moto-gakku in central area of Kyoto) are managing Jizo-bon as at 2012. This result shows Jizo-bon has been succeeded as community based ceremony. In addition, Jizo-bon is recently held as events in Moto-gakku. This shows Jizo-bon is evaluated as community resource rather than religious one in the context of Machi-zukuri.

Secondary, we clarified people (ex. apartment residents) who tend to be unfamiliar with community activities also join in Jizo-bon by analyzing component of participants to Jizo-bon with questionnaire to community leader and hearing to participants. This result means Jizo-bon plays a role in the creation of a resilient community in terms of improving the “diversity” of community members which is one of “the potential characteristics of resilient communities”. In addition, we considered about the reason why Jizo-bon play a role described as above. We can say Jizo-bon has “flexibility” from view of selectivity of events, number of participants and place corresponded to the situation of each communities.

In the conclusion, it is safe to say that these results show Jizo-bon is community resource which has experienced various external changes in the long time and succeeded as “the core” of community and play an important role in local community management in the era of uncertainty.

By the way, this paper didn’t examine “redundancy” which is another condition of “the potential characteristics” of resilient communities together with “diversity”. We have to examine “redundancy” of relationships from viewpoints of management of cho and Jizo-bon. Furthermore, we also have to examine “ability of adaptation to uncertain change” more than “potential characteristics” through case study of community which experienced adaptation to uncertain change and crisis. These are future subjects and we will discuss them in another paper.

(2014年6月6日原稿受理, 2015年5月18日採用決定)